

捏造の技法

あるいは記号としての他者との関係

坂上秋成
Akagami Shūsei

0 他者の条件

花園春太郎はかつて白血病に罹っていたが、回復後は順調に高校生生活を営んでいる。しかし、当然のことながら大病には再発というリスクが付き物である。ある時は姉と口論になった際、彼女の口から再発によって五年以内に死に至る確率が一割存在するという事実を告げられる。その翌日、クラスメイトの真島が恋愛関係にある女教師に裏切られ、カッターナイフを手にしている場面に遭遇した春太郎は、こじれた恋愛関係の結果として人を刺すという行為のくだらなさについて一通りの説教を加えた後、泣きながら次のように叫ぶ。

フツの何がいけないんだ 俺は普通がいい!! 普通の高校生で 普通に恋愛して 普通に失恋して 普通に恥かいて 普通に普通の人間にはなりたくない
と思いたい!! 俺はお前みたいに普通になりたい!!¹

これはよしながふみの漫画、『フラワー・オブ・ライフ』からの一場面である。ここで「普通」という言葉を執拗に連呼する春太郎は、無論自らが「普通」ではないとする意識を持っている。しかし、本作全体を通して描かれている春太郎は紛れもなく「普通」の人間である。親友と漫画を描き、学園祭を楽しみ、家族と食事をする彼の姿は、すでに自身が欲望する「普通」の状態を体現している。したがって、彼の不安はこの言葉を発している瞬間に存在しているわけではない。一割の確率で訪れる白血病の再発による死、つまりは起こりうる未来の可能性が彼を追い詰めているのだ。

春太郎にとって、自身を「普通」から遠ざける条件とは、白血病という明示的な病である。なるほど、強い死を予感させる大病を患いその再発に怯える人間の苦悩は、「普通」の人間からの容易な理解や安易な言語化を拒むものだろう。その意味で彼に

1 よしながふみ『フラワー・オブ・ライフ』4巻(新書館、2007年)。

とって「普通」に見えるクラスメイトや家族たちは、自分の悩みを理解しない存在として立ち現れることになる。

しかし、白血病はたまたま顕在化した一つの可能性に過ぎない。再発の可能性がなくなったとしても、また新たな病が春太郎を襲うかもしれないし、不幸な事故が彼の身に起こるかもしれない。彼は永遠に自分が「普通」ではなくなる可能性から逃れることは出来ないのである。同時に、「普通」からの逸脱可能性は自分以外の人間に対しても適用される。春太郎の親友であり、共に漫画家になる夢を追いかけている三國翔太が突如として漫画を嫌悪する人間に変容し、春太郎とのコミュニケーションを放棄することは十分にあり得る。その時春太郎はかつての親友に対して脅威なり敵意なりを覚えることになるだろう。

自身にそのような不快な刺激を与える可能性を孕む者。我々はそのような存在を他者と呼んでいる。

ヴィトゲンシュタインにとっての他者とは、自らと同じ言語ゲーム(規則)を共有していない存在を指している。そうであれば、「白血病の苦悩」という重大なことが明らかでありながらも、その性質が共有されにくいファクターを抱えた春太郎にとって大多数の人間は他者として顕現する。だが、春太郎の身体から再発の可能性が消えた瞬間、それまで他者であった「普通」の人間たちが自分と同質のものに突如変容するということが起こりうるだろうか。あるいは、彼らにとっての他者であった春太郎が即座に「普通」の仲間に加わるといふ事態が生じるだろうか。現代を生きる我々はそれがいかに頼りない願望であるかを知っている。

他者という言葉は時代や論者によって性質を変えてきたが、現在においても思考を続けるべき重要な概念である。だが、この言葉がいささかマジックタムとして機能し始めている点には注意せねばならない。柄谷行人はヴィトゲンシュタインの他者概念を援用しつつ、「他者」は、すでにいったように、外国人や子供のよう

われわれの言葉をまったく理解しないような相手でなければならぬ」と語っている。² そのこと自体は無諷刺ではない。しかし、「外国人」や「子供」、あるいは「狂人」や「異常者」といったタグを首につけた者が相手であれば、我々は彼の他者性に遭遇する前段階として、予測し、身構えることが可能である。そのことを考慮すれば、柄谷が考える他者は、その脅威に対して我々が予期できる範囲において、「裸の他者」として表現できるものだろう。しかし、我々にとって真に問題なのは「洋服を着た他者」である。彼らは目に見えない形でタグをぶら下げてはおらず、我々のすぐ隣に何食わぬ顔で存在している。友人や恋人、家族や親戚に対して常に警戒心を持つ人間はそうそういるものではない。だからこそ、彼らが日常の間隙を縫って共役不可能性を見せる瞬間に対して我々は無防備になる。そして、おそらく「洋服を着た他者」という身近に息をする相手の他者性こそが、我々の生にとってはこの上ない脅威となる。

この先私が展開する他者についての議論の目的は、いささか磨耗し、空洞化してしまった他者というタームに現実的な強度を回復させることにある。言語体系の異なる外国人や、言語そのものを十全に獲得していない幼児といった極端なサンプルを対象とした議論は明らかに問題を過度に抽象化してしまっている。それは全身を赤くペインティングした裸の男を指差して「他者だ!」と叫ぶ行為に等しい。だが多くの場合、我々の前に現れる他者はコートを羽織り、ベールを被っている——同時に、ここには相手もまた我々をベールを被つたものとして眺めるといふ対称的な関係が生まれる。そして現代を生きる我々に必要なのは、身近にいる友人や家族がふとした拍子にベールを外し、見慣れぬ姿を曝け出したその瞬間にどのような態度を採ることが可能かという、より私的なレヴェルで生じてくる問題への対処法である。

このような前提は、必然として全ての人間は他者であるという孤独な思想を招き寄せる。しかし、現実的な問題として、我々は常に全ての人間に対して怯えているのだ。それは多くの場合、意識に上る前に遂行されている脳からの命令である。フロイトが「快感原則の彼岸」で（その理論が完全ではないことを念頭に置きながら）語つたように、人間は興奮や刺激を取り除き、安定した状況に収まりたいとする欲望を抱きながら（「快感原則」、外界からの重圧のもとで自身を守るために、安定を目的としながらも不快な刺激に耐えようとする心的構造（「現実原則」を抱えている。³）社会や共同体と共に生存していく限り、他者の他者性を自己から切り離すことは出来ない。だからこそ、我々は自分に刺激や興奮をもたらす他者を回避したいと望みながらも、後

2 柄谷行人『探究 I』（講談社学術文庫、1992年）32頁。
3 S・フロイト『自我論集』（竹田青嗣編／中山元訳、ちくま学芸文庫、1996年）。
4 G・W・F・ヘーゲル『精神現象学』（長谷川宏訳、作品社、1998年）131頁。

に訪れる快を得るための現実的な処方箋として、彼らに向き合うことを選択するのである。

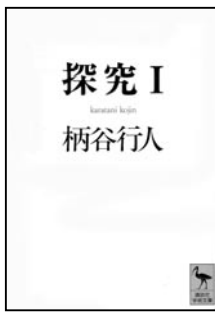
ここでもう一点確認しておくことがある。それは他者性が我々に対して、決して現前することは無いという点だ。我々がある人物の他者性を認識する際、すでにその他者性は何らかの脅威へと変換されてしまっているからである。つまり、他者性とは常に、変質の可能性を秘めた、脅威や恐怖の潜在性と同義なのだ。

このような立場をとる限り、我々はヘーゲルが意味したような他者の概念を排除することになるだろう。ヘーゲルは『精神現象学』において、「二つの自己意識は、たがいに承認しあう関係にある意識として、たがいに承認しあうのである」と述べている。⁴ 彼にとって自己意識とはまた別の自己意識による承認の結果として存在するものである。この別の自己意識こそがヘーゲルの他者になるが、あくまでも彼が目指すのは二つの意識が承認を経て同一性に至ることである。だが、この時他者はある主体に承認を与えることが前提とされているため、それは主体の意識の延長として捉えれば事足りるものに過ぎない。言い換えれば、弁証法的に主体と他者が同一性を獲得することが前提となるならば、他者を他者と呼称する必要がないということだ。こうした「承認を与えてくれる他者」は自己意識の一部であり、「脅威の潜在性」としての他者とは全く異質のものである。

ならばヴィトゲンシュタインが述べた形での他者が十分な定義を持つかといえませんが、彼も言語ゲームを互いに共有していないもの同士の間接関係においては「教える—学ぶ」という図式が生起すると考えた。「学ぶ」生徒が仮にテストで満点をとれば、それは「教える」ことが成功していたのであり、コミュニケーションが成立していたという事実が事後的に見出されるというわけだ。同様に、柄谷行人が考えた「売る—買う」のモデルにおいても、商品が売れたあとで設定価格が適切だった事実が発見される。しかし、いずれのモデルにおいても、そこに積極的なコミュニケーション



よしながふみ
『フラワー・オブ・ライフ』



柄谷行人『探究 I』

ーションが成立していたかを確認することはできない。ひよっとすると「学ぶ」生徒は「教える」教師の存在を無視して自「流」の勉強をしていたのかもしれないし、「買う」消費者は「売る」商人から商品を購入しなければ後にはひどい目に遭わされると考えたのかもしれない。つまり、我々が他者関係の中で事後的にコミュニケーションの成立を見るとき、それはある結果とコミュニケーションをダイレクトに結び付けているだけで、互いの意思が過程において噛み合っていたのか否かを最終的に決定することは出来ないのである。その意味で他者と分り合うことは原理的に不可能であり、事実関係をコミュニケーションの欲望にひきよせているだけだと考えることもできる。

続きは本誌で！